

資料紹介：尾崎清次（『琉球玩具図譜』著者）宛て書簡について

久場 政彦¹⁾

Material Note : The letter addressed to Seiji Ozaki
(The Author of Ryukyu Fork Toys pictorial book)

Masahiro KUBA¹⁾

はじめに

尾崎清次（1893-1979）は、郷土玩具の木版画集『玩具図譜』全5巻の作者である。『琉球玩具図譜』（1936刊、以下『図譜』と略す）はその終巻にあたり、尾崎が1932年（昭和7）の沖縄調査旅行の際に蒐集した琉球玩具を基に製作・刊行したとされる。しかし、当時は全国的に郷土玩具ブームが到来するなか、東京・大阪などの大都市圏を中心に商品化された琉球玩具が広く流通しており、尾崎の玩具コレクションにも県外で販売されていた商品が多数含まれている。このことから、尾崎は『図譜』の素材となった玩具類を複数のルートを通して蒐集していたことが推定される。

今回紹介する資料は、当館所蔵の伊藤勝一コレクションに含まれる尾崎宛て書簡の写しである。書簡の差出人は、那覇市壺屋町に在った陶器類の製造・販売を手掛ける文琳堂の陶工・兼本盛仁なる人物である。書簡には「昭和7年9月24日」の消印があり、尾崎の沖縄調査旅行の時期と一致している。書簡の内容は、尾崎から注文を受けた玩具類の納品が滞っている事へのお詫び、土製玩具の商品定価一覧、玩具製造の現状等が便箋4枚（落丁有り？）にわたり述べられている。（資料1参照）

当時、琉球玩具は、異国趣味の作風で全国の「趣味家」と呼ばれるコレクターの間で人気の高い商品であった。その中には、窯業の町・壺屋の陶工たちが製作した土製玩具も含まれているが、これまで本品の生産体制や需要の状況、販売経路など不明な点が多かった。今回紹介する書簡は、これらの解明に

つながる資料である。

本稿では、書簡の内容を検討するとともに、琉球玩具をめぐる問題について若干の考察を行う。

壺屋と土製玩具

書簡の内容を検討する前に、土製玩具と壺屋の関係について概観しておきたい。

琉球玩具は、素材の別により、紙と土（焼物）、木（練物を含む）、紙と竹、糸と布等に分類される。その中で、土製玩具は、土人形（魚釣り人形、風俗人形、舞踊人形など）や壺型・家型の置物、土鈴などの種類があり、戦前まで壺屋の陶工たちが製作していた。

では、壺屋および壺屋焼の中で、土製玩具はどのような位置付けであったのか。明治以降の壺屋の歴史をひも解きながら、土製玩具のあらましを観ていきたい。

壺屋の焼物には、上焼、荒焼、アカムヌーなどの種類がある。土製玩具に関係するのは前2者である。上焼は釉薬を掛けて焼成した絵付陶器で、酒器や茶碗、皿、鉢などの日用品が作られていた。荒焼は釉薬を用いず、水甕や壺などの大型製品が主流であった。上焼と荒焼は技法が異なるため、それぞれに専門の陶工たちがいた。

明治以降、安価なスンカンマカイ（本土産磁器）が大量に流入した結果、上焼の生産が激減する。さらに、泡盛の県外出荷の増大により大量の酒壺を必要としたため、上焼から荒焼に転向する陶工が続出した。当時、こうした状況は「アラヤチパーキ、ジョウヤチヒンスー」（荒焼陶工は湯水の如く銭を使い、

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1.

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha City, Okinawa Prefecture 900-0006, Japan

神戸市大手権現町三ノ四九 尾崎清次 様 至急
 沖繩縣那覇市壺屋町一一五 文琳堂 兼本盛仁 拜
 九月廿四日 (昭和七年九月二十四日の消印あり：筆者注)

拝啓 残暑の儀に候処益々御清栄の段まかり候
 物品度々御催促を受け候 人形類早速御送附致し查收甚だ心外の至りに存じ居
 り候 実には肥後氏方に御依頼して送附致す考えに候処拙者に早く送る様にと
 の事 猶舞踊人形も共にとの御命に候処品代の件も承知せず不安にて差しひか
 え申し候 此の度は簡単な品計りにて申し訳けに御送りするに止め此後は御命
 に応ずる様努力致す可く候 別紙定價御一覽下され度願ひ上候 先の宿より仕
 事の便利の工場持ちとの家に引越し製作も充分出来る様に相成り居り候 古色陶
 器も他店より良いとの評判にて此の度碗物●●等の御命相受け申し候 事実に
 の事は本品御知り(次頁落丁カ)
 此度送附致し候人形は池(箱庭用)などに置くに適するものにて琉球古来のも
 のにて中形、小形は近頃の彩色を加味し居り候 舞踊人形も五六年前より流りの
 物にて昔は素焼のみにて四日市用に売り居りし物にて其の外張りの物も有之候
 も値高く内地の物の比にて良之候も或る特色(地方的の)は有るやも知れ申さ
 ず一ヶ一ヶ程度と存じ候も御注文なされば其の道の人承知致し居り候へば取引
 きも申し受け候 此度の人形は二五平均にて馬は八〇 壺は蓋のものも有之
 候も只今品切れ候 家も二五以後は二〇にて宜しき候形も種々有之候

代金總計四円五拾五錢也 運び賃
 荷箱代(荷造り)十五錢 壺屋より通堂まで往復三〇錢程
 總計金四円七拾錢に候 つき申し候もこれ又私持ちに候

品目	單価	卸値	備考
置物	魚釣人形 小 二五	三割引	高サ三寸一四寸
全	中 二五		高サ五寸一七寸
全	家 小 二五		高サ二、五寸一四寸
全	中 三五		二棟一又ハニ階一
全	風俗人形 小 四〇		五寸角一ニ階一三階
全	中 一〇		五寸一六寸 女、男、馬子、色々
全	舞踊人形 中 一五		一尺以内
全	小 一五		高サ八寸位
全	大 二五		高サ六寸位
全	馬 小 三〇		一尺以内
全	中 一〇		高サ二、五一三寸
全	大 一〇		高サ四一六寸
全	六〇		其ノ他御注文ニ応ズ

今の人に御調達相願ひ申し候 店主は護得久氏小生は監督の任に居り主に置物
 と南蛮類の製造、時代付けをやり居り候 此度は品代あらまし御通知致し置き
 候 以折り返し御問合せ又は御注文被下度願ひ上て御送附も運賃は貴殿御持ち
 の向ふ払ひとし代金引き替へに御願ひ致し候も次僉よりは何か御意見を承り
 度く御注文は成る可く前金か内金は御受け申し度く考へ居り候 以何卒宜敷様
 御考へ下され度候 先づは延引の御詫び旁々御通知まで申し上度様 草々
 九月廿三日 兼本盛仁

尾崎清次 様

しかし、1908年（明治41）に税制が変更されて泡盛への優遇措置も撤廃となり、県外への移出は衰退に向かう。大正～昭和初期になると、かつて「チブヤーハワイ」（壺屋はハワイの賑わい）と呼ばれた隆盛は影を潜め、県内向けに荒焼の甕・壺類を細々と製造する低迷期を迎える。当時、壺屋の経済流通に影響力のあった寄留商人たちは、同地の窮乏を見かねて、陶工たちに花器や獅子像などの置物を製造するよう奨励した。いわゆる県外市場に向けて新しい商品の製作を提案したのである。この中に土製玩具も含まれていた。

尾崎は、那覇市壺屋町の文琳堂に土製玩具を注文していた。現地で直接買い付けた品もあるだろうが、土製玩具の多くは製造元に注文して郵送で入手するという方法をとっていたと思われる。文琳堂については資料が乏しく詳細は不明である。書簡で

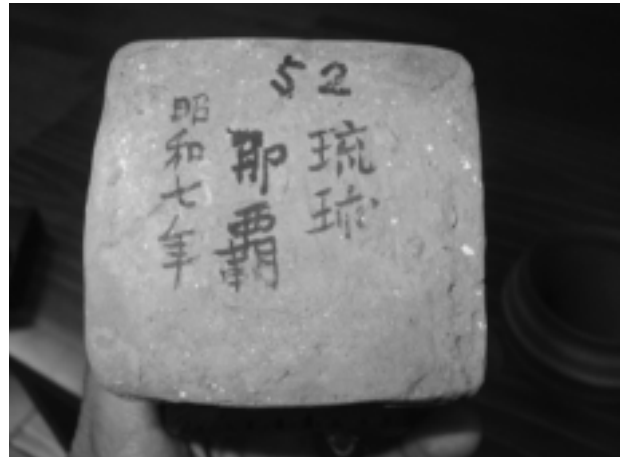
今回の書簡の記述から、土製玩具の中でも安価な魚釣人形、家型置物などは、日本の伝統的なミニチュア模型である「箱庭」の素材として販売されていたことが判明した。さらに「(魚釣人形は)琉球古来のものは中形、小形は近頃の彩色加味し居り候。舞踊人形も五六年前より流りの物にて昔は素焼のみ」とあり、当時は旧来の素朴な玩具に加えて、当世風の彩色を施した新型の玩具が製造されていたことが判る。上述の寄留商人たちが提案した県外市場向けの商品とは、こうした新しい傾向(作風)のものであったと思われる。

因みに『図譜』をみると、6種の土製玩具（魚釣人形3、家1、馬1、壺1）が採録されている。その内の「第二十五圖 釣人」と「第二十七圖 家」、「第二十八圖 壺」の3種は尾崎コレクションに含まれていることが確認できた（資料2参照）。さら

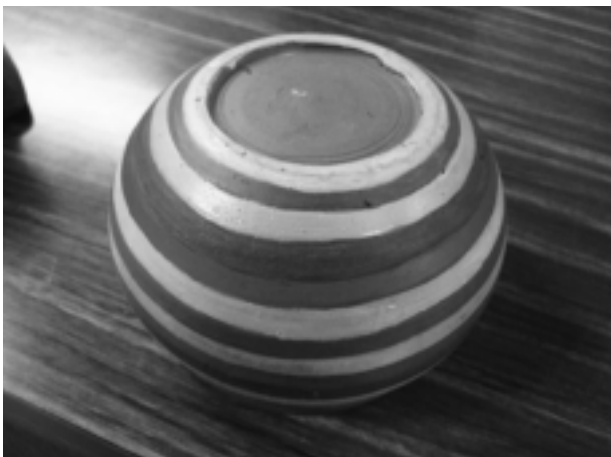
【資料2】 <土製玩具>他 画像・・・ 尾崎清次コレクションより（日本玩具博物館蔵）



（1）家型の置物



（2）家型の置物（底部）



（3）壺型の置物（底部）



（4）魚釣人形（小）



（5）琉球古典焼人形（舞踊人形カ？）



（6）琉球張り子（矢賀商店製）

に、釣人の玩具は、書簡に登場する魚釣人形と同一である可能性が高い。『図譜』の解説に「前圖より稍小形の荒焼人形」で、その「彩色法は前圖のものより稍緻密で、少しく近代風を加味して素朴な點に缺けて居る」とあり、書簡の中で「近頃の彩色を加味し居り」と述べていることと符合している。

また、家型の置物についても、現物の底部に「琉球 那覇 昭和7年」の墨書があり、『図譜』の版面とも近似していることから同一のものと考えて間違いない。なお、この玩具については、『図譜』の解説で「近時流行する強烈なる彩色を施した木製玩具と比較して、此素朴な彩色は一顧に値する」と評価している。

書簡から、尾崎が注文した品代の総計は4円55銭である。その内訳は不詳であるが、書簡の内容から察するに魚釣人形、家、馬、蓋なし壺、舞踊人形等が含まれていたと思われる。

書簡にある玩具類の商品価格は、魚釣人形と家、馬などが25～80銭、風俗人形と舞踊人形が1円～3円と値段に差がある。舞踊人形の価格である3円は、どれだけの価値があったか。試みに、当時の物価と比較してみると、昭和10～15年当時の巡査の俸給が32円、泡盛1升が90銭、新聞購読料1ヶ月分が60銭である。昭和5・6年頃の陶器類についても、大型のアンダガーミ（油壺）が5個セットで40銭と安価である。これらと比較しても、舞踊人形は明らかに高価であり、生産者にとって割の良い商品であったと言えるだろう。

新聞社・百貨店と地方物産

往時の沖縄では、張り子等の玩具類は高価なぜいたく品で、庶民が気軽に購入することは難しかった。専門の玩具店もなく、年1度のユッカヌヒー（旧暦5月4日）前後の数日間だけ開設される玩具市で購入するのが慣わしであった。

明治期になり、ブリキ製やセルロイド製の舶来玩具が出回るようになると、郷土玩具は急速に衰退する。1910年（明治43）6月9日付の沖縄毎日新聞に掲載された記事「五月節句と玩具」によると、「大門前通り、平尾本店通りの両側は（中略）立錐の余地なき程」に露店が立ち並ぶ盛況ぶりであったが、店頭に並べられる「玩具類は阪神及び鹿児島県よりの

輸入品九分通りを占め」ている有様で、「本県産の玩具類は御重箱、不倒翁、風車附の小旗、張子鼓等の如き古来より千篇一律、劣等品のみにて之に加へて値段も輸入品より比較的高価なる為買手少なく業者は頭痛鉢巻きにて青息気を吐きし居るなり」と苦しい状況を描写している。

さらに時代が下り、1937年（昭和12）6月20日付の沖縄日報では、「懐しの玩具市“四日の日”近づいて東町に露店居並ぶ」と題する記事の中で、道端の露台の上には「セルロイド製品の氾濫だ。郷土玩具を滅ぼしたブリキ製品も、セルロイドに仇を討たれた形である」としたうえで、「（琉球玩具の）二つ三つをとある露店の片隅でやつと見つけ出した。昔なつかしい「島物」はこういふはかない身の上となつてゐるのだ」と、消滅寸前の境遇を哀れむ内容となっている。

当時の新聞記事を読む限り、琉球玩具は需要もなく壊滅寸前の状態であったような印象を抱く。しかし、前述のように昭和期における琉球玩具の販売状況は全国にシェアを広げており、「趣味家」と呼ばれる個人の蒐集家を中心に需要があった。では、琉球玩具の流通販売はどのように展開していたのだろうか。

昭和6年（1931）の沖縄朝日新聞には、大阪の朝日新聞本社で中小商工業生産品展即売会を開催した際の記事が「総じて格安の物が賣れ行きはよい、琉球物は人気を占む」と題して掲載されており、「沖縄県はなんといっても会場の人気をあつめ」るほどの盛況ぶりで、人気商品の泡盛とともに「グロテスクな古代玩具も飛ぶやうに売れる」と述べている。ここで言う「グロテスクな古代玩具」が具体的に何を指しているのかは定かでないが、郷土玩具との関連は十分にあり得る。少なくとも、当時の大阪では、沖縄の物産が需要のある人気商品であったことは事実であり、琉球玩具の販路拡大の糸口もそこに見出すことが出来る。

やや時代は下るが、昭和15年（1940）8月18日付の大阪朝日新聞には、大阪なんば高島屋で開催する「沖縄民芸品と物産即売会」の広告が掲載されており、琉球織物、漆器、琉球焼と並んで郷土玩具が対象商品として登場している。

以上の記事から、当時の新聞社や百貨店では、展

覧会や即売会を盛んに催して「趣味」の文化を演出し、その素材として郷土の物産を取り扱っていたことが判る。琉球玩具も、そうした時流に乗って販路を拡大していったのである。

泡盛商と琉球玩具

これに先立つ昭和5年（1930）6月6日付の沖縄朝日新聞には「銅牌を受けた琉球玩具—全国農民芸術展覧会で—（大阪通信）」と題する記事が載り、財団法人富民協会主催の第二回全国農民芸術展覧会が大阪三越で開催され、台湾・朝鮮を含む帝国全土から出品された特産品約二千個の中から、那覇市の矢賀宗友の作品「琉球古代玩具」が銅牌（金牌7、銀牌14、銅牌20）を授与された事を伝えている。

この記事の主役である矢賀宗友は、琉球張り子のブランド化に成功した人物であるが、1933年（昭和8）3月5日発行の『南島』第3号（大宜味朝徳主幹）の「東京泡盛商一覧」に名を連ねていることから、泡盛販売が本業であったことが判る。しかし、同じ紙面の広告欄には、「郷土玩具製造販賣・泡盛卸小賣、沖縄屋矢賀商店」とあるから、郷土玩具販売にも相当力を入れていたと思われる。

また、南島社（東京市本郷区蓬萊町5）郷友版『南島』3号（1933年9月）広告欄に掲載されている泡盛商・仲本商店（仲本宗厚）も、取扱商品として泡盛の他に、琉球古代焼、花瓶置物、琉球漆器などと並んで琉球玩具を挙げている。

奇しくも、東京における琉球玩具販売はどちらも泡盛商であるが、偶然の一致ではない。先述の「東京泡盛商一覧」に掲載されている泡盛商は実に96人をかぞえ、東京琉球泡盛商組合の第1回評議員会（昭和8年2月15日於竜宮園）も開催されるなど、強固な組織体制と流通網を形成していた。明治10年代から県外進出の実績をもつ泡盛業界の流通ネットワークを利用して、泡盛商は玩具類を含めた郷土の物産を販売していたのである。

以上、昭和初期における琉球玩具の県外への流通に関する若干の考察を試みた。同時代、沖縄で衰退・消滅の危機に瀕していた琉球玩具は、流通経済の拡大発展と通信文化の浸透するなか、新聞社・百貨店や泡盛業界などの企業戦略と連動して全国に市場展開していったのである。

さいごに

沖縄の郷土玩具に関する研究は、ブリキ・セルロイド玩具に駆逐されて衰退・消滅の一途をたどる側面だけが強調されて、全国各地に琉球玩具が蒐集・保管されているという事実に目を背けてきた経緯がある。本稿がこうした状況を打開する端緒になれば幸いである。

最後に、本稿執筆にあたって、新城栄徳氏（琉文21主宰）と倉成多郎氏（那覇市壺屋焼物博物館学芸員）には大変お世話になった。本誌を借りて感謝申し上げます。

追記 伊藤勝一コレクションは、沖縄の歴史・美術工芸・風俗を中心に1,020件余の膨大な資料からなる。伊藤勝一氏（1944～2010）は、京都市内の書籍・雑誌卸「洛東書院」を経て、沖縄県読谷村で古美術「卯庵」を営む。京都沖縄県人会幹事、南島史学会会員、仏桑華の会会員。

参考文献

- ・『やちむん 特集・《壺屋》』第4号（1973 やちむん会）
- ・『琉球の文化＜特集・琉球の焼物＞』創刊号（1972 琉球文化社）
- ・「沖縄のモノづくりの伝統と創造 戦前期における工芸近代化の試み」シンポジウム報告書（2006 東京文化財研究所、沖縄県立芸術大学）
- ・平成20年度壺屋焼物博物館開館10周年記念特別展「壺屋焼 近代百年のあゆみ」（2008）
- ・星雅彦「壺屋今昔 焼物の古里をたずねて」『西日本文化—戦後50年特集沖縄の歴史と文化—惨禍こえ、たくましくはばたく〜』313.P82（1995 西日本文化協会）
- ・鈴木文子「玩具と帝国—趣味家集団の通信ネットワークと植民地」『文学部論集』第93号（2009 佛教大学）
- ・久場政彦「研究ノート：尾崎清次と『琉球玩具図譜』について」『沖縄県立博物館紀要』第30号（2004）

